



「2018年度

リフレッシュプログラム」へキックオフ

「こらっせ」が活動をはじめてから今年で7年目になります。

今年のキックオフミーティングは、こらっせユース OB の石渡さんに移住先の陸前高田市広田町での経験を通し、東北の被災地が抱える問題、若者が住民と協働して町づくりにチャレンジしている様子を話してもらいます。こらっせの夏のプログラムと楳葉町での学童応援について、こらっせユースの大学生による報告もあります。



こらっせユースOBが語る

陸前高田になぜ移住したのか

石渡博之さん (SET コーディネーター)

楳葉学童保育訪問とリフレッシュプログラムの報告
こらっせユース

日時：5月6日（日）14時～16時30分

会場：県民サポートセンター 11階コラボスタジオ

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f5681/p16362.html>

資料代：500円



広田町は岩手県陸前高田市広田湾に面した人口3200人の漁師町です。東日本大震災では津波で死者・行方不明者50人以上の犠牲をだし、三分の一の家屋が半壊・全壊しました。3.11の直後、大学生が支援にはいり、「まちづくり」の団体・SETを創設しました。

石渡博之さんは青山学院大学教育学部に在学中、こらっせのリフレッシュプログラムに参加してくれました。大学1年3月からSETの活動に関わり、卒業後は移住を決意。現在は仲間と一緒にシェアハウスに住み、ワカメ漁を手伝いながら、SETのプログラムの中心メンバーの一人となっています。

SETは大学生を対象にして宿泊型研修を実施していて、広田町に春休み・夏休みに1週間滞在するコースと移住を視野にいたれた4か月のコースがあり、いずれも町の課題を見つけて町民と一緒に解決策を考えていく内容です。将来をどうするか模索している大学生の参加も多く、今までに1500人の大学生が参加、10人が広田町に移住しています。

主催：福島子ども・こらっせ神奈川

連絡先：TEL:045-353-9008 FAX:045-353-9998

E-mail: info@korasse-kanagawa.org

－ 2018 キックオフ講演会報告 － 自分の生き方を考え陸前高田に移住 石渡博之さん（SET コーディネーター）

5月6日（日）かながわ県民活動サポートセンターで、2018年度「神奈川リフレッシュプログラム」に向けたキックオフ講演会が行われました。約50人が集まり講師の話や学生の報告を熱心に聞きました。

最初にあいさつに立った山際正道代表は「今年は7年目となります。檜葉町での学童支援も軌道に乗ってきました。私たちは子どもの成長を願い支援を進めます。夏の『リフレッシュプログラム』を成功させましょう」と述べました。

このあと「こらっせ」の活動に学生スタッフ（「こらっせユース」）として関わり、卒業後に東日本大震災の被災地・岩手県陸前高田市のNPOであるSETでスタッフとして活動している石渡博之さんから「陸前高田になぜ移住したのか」と題する講演がありました。陸前高田市は、中心部の大半が津波に被災、「奇跡の一本松」で有名になったこともあり、ご存じの方も多と思います。かさ上げ工事が進み店舗や住宅が建ち始めました。石渡さんは、中心部から車で30分かかる半島にある漁業が盛んな同市広田町で活動しています。石渡さんの講演の概要です。

年間1000人の大学生が参加

僕は大学1、2年生の時にこらっせのプログラムに参加しました。2年生になる直前に岩手県陸前高田市広田町で行われていたSET主催の1週間の大学生向けのプログラムに初めて参加、その後の大学時代の大半はSETに関わっていました。僕は教員を目指していましたが、SETに参加して自分の生き方を考えるようになり、卒業後にNPO法人となったSETに加わりました。現在は町の人達と大学生をつなぐコーディネーターとして活動しています。



陸前高田市広田町の人口は約3000人、半分が高齢者です。SETは東日本大震災の被災地支援で当時の大学生が始めました。圧倒的な被災の現実と絶望感を受けたのですが、町の人達の気持ちを受けて、広田町を残すことと都会の大学生に参加してもらい自分の生き方を考える場と位置づけ活動を続けてきました。代表の三井俊介は3年前の市議選に立候補しトップ当選しました。地縁、血縁もないなかで町を変えたいという思いが届いたのだと思います。

広田町は、海がきれいで古民家が並んでいます。人のつながりをとても大事にする町です。でも50年後にはなくなるかもしれないのです。過疎で働くところがなく、若者は都会に出て行ってしまふからです。僕と同じ世代は5人しかいません。ワカメ漁も漁業も担う若者が少ないのが現状です。

人口減少は衰退とかマイナスのイメージが多いのですが、SETは人が少ないからこそ豊かな社会を作れるのではないかと考えています。活動は大学生にフォーカスしています。大学生に広田町に

来て地元の人と街づくりをする中で、自分の生き方を考えるという課題を解決していったらと考えています。

大学生が1週間滞在する地域おこしの実践プログラムは、この春で32期（僕が最初に参加したのは第3期です）になりました。1回に120-130人、年間1000人受け入れています。また、昨年10月には4ヶ月間、滞在して「やりたいことととことん挑戦する「移住留学プログラム」を開校しました。語学を学びたい人が海外留学するように「やりたいことを実現するなら広田町へ」というのがコンセプトです。

このほか、中高生の修学旅行を受け入れるために民泊を誘致するとか、広田町の中高生に自分の生き方を考えるプログラムもやっています。東京の大学の受検案内など人生の選択肢を広げるキャリア教育プログラムです。代表の三井が中心になって「空き家バンク」も立ち上げています。僕が関わったのですが、古民家に眠っていた絵を見つけました。畠山孝一さんという80過ぎの方で、岩の絵を描いていました。大迫力の絵です。大学生が来る時に一日美術館をやろうと提案、このことが契機になって恒常的な美術館「三陸館」の開設に結びつきました。

漁師になりたい

僕が移住を決意したのは1週間のプログラムに参加、町のこれからのことや社会のことなどを考えていく中で、今誰のためにやっているのかということのを大事にして生きようと思ったからです。親に話したら「まともなところに就職しろ」とか「1年就職してからやったら」と言われ「新卒でやりたい」と言ったら「では家を出て行きなさい」と言われました。

移住して生活していけるのか、とよく聞かれるのですが、野菜はほとんど買ったことがありません。おすそ分けが多いです。ですからお金はほとんど使いません。1カ月に一度も財布を開けなかったこともあります。現在、漁師の手伝いをしています。漁師になりたいという思いは強いのですが、でもなり手がいないからやるのではなく、漁業が続けられる仕組みを作りたいと考えています。たとえば気仙沼ではやっていますが、行政との連携です。

石渡さんの講演の後、フロアからの質問・意見を受けました。広田町の様子や移住の動機など多くの質問がありました。また、実際にSETのプログラムに参加した学生からも発言がありました。

「こらっせユース」も報告

「こらっせユース」の大学生が報告しました。坪井香澄さん、古屋結麻さん、内海克也さんが昨年夏に山北町で2泊3日で行った「リフレッシュプログラム」について、写真などで詳しく説明をしました。また、加藤柚菜さん、熊谷健太さんが、春休みに2度行った学生による檜葉町での学童保育支援の様子を報告しました。どちらの報告も子どもたちに対する気持ちがよく伝わってくる、とてもわかりやすい内容でした。会場からは「こらっせの活動についてどう思うか」、「何が役に立っているのか」などの質問も出て、和気あいあいとしたムードの中で報告会は終了しました。

